

松任谷正隆の

僕のひとりごと

21

VOL.21 その後……。

前回、豪邸の話を書いた。これ以上凄い家は見たこともない、というような……。

その家の主であった中学生は現在、成城でささやかなライブハウスをやっている。

同じバンドにいたキーボード担当の中学生は今やベテランのミュージシャンだ。

ベースの中学生は普通に結婚をし、息子ももう成人はしたのかな。

そしてドラムの中学生はその後美大に入学し、うちのかみさんと接近遭遇していたみたいだ。

というように、なんだかそれぞれとは、今も近いような遠いような不思議な位置にいる。

SNSがそんなふうに繋いでくれている、というわけである。

これはいいことなのか、悪いことなのか……まあ、いいことなんだろう。

豪邸の娘が、たしか外国人のボーイフレンドを追ってL.Aかどこかに逃避行したのは、

彼女たちのバンドの発表会から数年経ってからだったと思う。

バンドはバラバラになり、キーボードの中学生は高校に上がるとともにジャズスクールに通い始めた。

こういうことを教えてくれるのはベース担当の子で、

彼女はさっさとベースは辞め、

その後、僕と近い奴とつきあい始め、そしてその後、

僕の弟のアマチュアカントリーバンドのメンバーとつきあい始めた。

ま、割合僕と近い位置にいたから、

いろいろと僕に情報が伝わっていたということだと思う。

そんなこんなしているうちに、僕も運命の女子と出会うことになる。

まあ、平たく言えばかみさんと出会うわけである。

デビューをしたらライブをやらなくてはならない。

というわけで、僕は楽器の出来るメンバーを集めることになった。



とりえず同級生で楽器の出来るやつに声を掛けた。もちろん全員がアマチュア。
でも、どうしてもキーボードだけが見つからず、最後に声を掛けたのが例の中学生・・・
いや、この頃は高校生だったかな・・・である。

海のものとも山のものとも思われないデビュー時なんてそんなもの。

お金もないから、誰かの家で練習をしたい。とそんな時に快く手を上げてくれたのが、そのキーボードの彼女だった。
三軒茶屋のちょっと奥まったところにある彼女の家は、とても重厚で、歴史のありそうな300坪くらいの一軒家だった。

例の豪邸とは別の趣がある家で、ご両親の堅気具合が漂って来るというか、

そんな応接間にドラムセットを置いて、ギターやベースのアンプを置いた。

そんなに広くはなかったが、しーんとした環境とか、

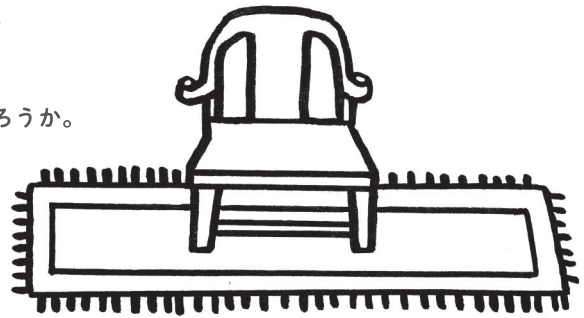
磨き込まれた木製のアームチェアとかが、僕たちを緊張させた。

当時の常で、木製のフロアにはペルシャ絨毯が敷かれ、

その厚みときたら、我が家の3倍くらいはあったのではないだろうか。

ドラムの奴が音を出した瞬間、その音は絨毯に吸い込まれ、

余韻の「よ」の字もなかったことを思い出す。



彼女の家で何回くらい練習したのだろう。

さすがにもう記憶の彼方にあってわからないが、何回か練習をしたのちに、

軽井沢にある彼女の別荘に一同で行ったことははっきりと覚えている。

そんなにやりたい放題やらせてもらえたのは、キーボードの女子がいい子だったのか、

ご両親が理解がある人たちだったのか、きっとその両方だったと思うが、

今思えばこら辺からがそれぞれの本当の青春のスタートと言っていいのではないだろうか。

軽井沢ではいろいろと事件が起こるのだが、その話はまた次にでも・・・。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy